

霊的治療と信仰 第7部 ペ
トラルカの孤独生活におけ
る魂の護身術 Petrarca De
vita solitaria

小泉友美 KOIZUMI
TOMOMI



—

目次

霊的治療と信仰 ペトラルカの孤独生活における魂の護身術	1
---------------------------------------	---

霊的治療と信仰 ペトラルカの孤独生活における魂の護身術

ペトラルカの生涯について

"私は亡命の内には生まれ、亡命の内に生まれました。" (親近書簡集)

Francesco Petrarca フランチェスコ ペトラルカ (1304-1374) は最大のヨーロッパ ユマニストとされる哲学者であり、詩人。イタリアのトスカーナ州・アレッツォ生まれ、父親は神曲の著述家であり、政界を追放されて放浪生活を送り、分筆活動を送ったダンテ・アリギエーリ Dante Alighieri (1265-1321) の政治友達であり、教皇派 (白派) に属したが、皇帝派 (黒派) との政争に敗れて、フィレンツェを追放された亡命者でした。1311年にフランスに家族ごと移住し、修辞学を学び 1326 年に父の死後、南フランス・アヴィニョンで友人のユマニストの詩人ジョバンニ・ボッカッチョ Giovanni Boccaccio 1313-1375) と、カトリック聖職者の元で書記として働きながら、詩作に励んで、1341 年には、ローマ国会議事堂において桂冠詩人 (poeta laureatus) の名誉を受けました。ペトラルカの生涯は波乱万丈であり、ベストにより理想の恋人との死別、生涯聖職者として独身を貫いたものの、3 人の私生児を持ち罪の意識に苦しみ、自然の中での癒やしを受けて、キリスト教の信仰を深めて、読書三昧とごく限られた友人達に囲まれて、すべての権力放棄を経て、アルファ・ペトラルカ Arqua petrarca で過ごしこの地で没しました。

"孤独生活" De vita solitaria の著作は 1346 年から 1366 年にわたって著述されました。

南仏アヴィニョン近くのヴォークリューズという緑々とした谷間のソルグ川源流の泉の辺りに、家を買ひ、隠棲生活を送り始めました。

アヴィニョンの町から遠ざかった理由は、喧騒や様々な誘惑があり、新しい私生児が愛人の間に生まれた事による良心の呵責から逃れる為に、キリスト教の祈り、創作に没頭する生活を目指したからでした。

この孤独生活の作品の中で、ペトラルカはラテン文学の詩人や、旧約聖書の人物、キリストとその使徒達や、聖人 (女) 達を引用して、信仰と孤独生活における救いを紹介しています。

ここでは、ペトラルカの著作孤独生活内の旧約聖書の人物、キリストとその使徒達、聖人 (女) 達の孤独と信仰による救いを紹介したいと思います。

全人類の父 アダムの孤独

アダムは旧約聖書に登場する最初の人間であり、人類の始祖です。アダムの名前の由来は土（ヘブライ語でアダマー）から来ており、この土の塵を材料として、カミが人の形を造って、命の息を吹き入れて人間にしました。最初、アダムは孤独でしたが、カミはアダムが一人にいるのは良くないと思い、アダムのあばら骨を一本取って、すべての人類の母となるエヴァ（ヘブライ語でハヴァ、命）と名付けられた女性を創られました。

創世記 1・ 27

創世記 2・ 7

創世記 2・ 23

創世記 3・ 20 参照

ペトラルカは、Liber secundus II 章 1 節において、アダムの孤独はエヴァという女性伴侶の存在によって癒やされましたが、アダムが独身であった時は死なない不死の身であったのに、女性のエヴァという連れ添いが出来た事で死すべき身となつていいます。ペトラルカは、創世記内のエデンの園に植わっている善悪の知識の木の実を、エヴァと共に口にした事でカミの怒りを買ひ、追放された事よりいずれは死んで塵に帰る身となった事で、アダムの独身の立場を個人的に評価しています。

モーセの約束の地の孤独

モーセは重要かつ有名な預言者の一人であり、モーセの生涯は孤独より始まります。モーセの名前は引き出す者という意味です。モーセ五書（トーラー）の作家として知られ、エジプトのフォラオによって、イスラエル人に生まれる男子をすべて殺害するように命じる中で生まれ、両親より川の草の茂みに捨てられて、フォラオの娘に捨てられて育てられ、カミの命令より奴隷状態のヘブライ人をエジプトから連れ出す使命を受けました。モーセは民と共に 40 年にわたって、約束の地を求めてモーセはその地に入る事無く、亡くなりました。

出エジプト記 参照

ペトラルカは、Liber secundus III 章 1 節において、モーセが紅海を渡って長い旅の末、民を約束の地の入り口へと導きましたが、モーセは取り残されて死にました。ペトラルカの創造において、ただ独り、ただひたすらに祈りにすがって死んだといひます。また、モーセがシナイ山頂で燃える柴の中で始めてカミと出会った時、山や森の孤独の中で、岩から迸ってくる神聖な清水を飲料としていただきます、祈り暮らす姿を描いています。モーセの人生とは孤独によって光輝きあるものとなりました。

預言者エリヤの孤独

エリヤは旧約聖書に登場する預言者で、バアル崇拜への熱心な反対者で、ヤハウェ信仰と十戒の守護者として描かれます。カルメル山に祭壇を築いてカミに祈り、天から火を

降らせるという奇跡をなしました。

列王記上 19 章 1 節から 18 節

ペトラルカは Liber secundus III 章 2 節において、エリヤのホレブ山内の洞窟における孤独を描いています。エリヤの物語はカミがエリヤを通して、干ばつが長びき終わる事は無いとアハブ王に啓発する事より始まります。その後、天上のカミはエリヤに荒野に隠れるように指示しました。エリヤはカミの山ホレブへと向かい、洞窟に入り夜を過ごしました。そして、カミのお告げを受けました。その時、非常に激しい風が起こり、山を裂き、地震が起こりましたが、エリヤは洞穴の中で耐え忍び、洞窟の入り口でまたカミのお告げを聞いて、洞窟から出て荒野へと戻る様に指示を受けました。ペトラルカは、エリヤが洞窟における静けさと孤独のおかげで神的なものに通じる事が出来たといっています。

預言者エレミヤの孤独

預言者エレミヤの名前はヘブライ語で、ヤハウェが高めるという意味です。紀元前 7 世紀末から 6 世紀前半の、バビロニア捕囚時期に活動しました。預言者エレミヤの家族は、ダビデ王死後にソロモン王から祭司を除名させられ、追放されてアナトトという祭司達の集まる町にたどり着きました。紀元前 627 年頃に、若きエレミヤはカミの使命を受けて、励まされるままに、預言者の使命をまっとうし、バアル信仰を嫌いました。

エレミヤ書 8・23

エレミヤ書 15・17 - 18

ペトラルカは Liber secundus III 章 4 節において、エレミヤがカミの言葉を受け語る者として、苦境と絶望にたたされて、嘆き、社会から孤立して、絶えず昼も夜も泣いている情景を表現しています。

ペトラルカは、エレミヤが荒野の枯れた川(ワディ)において、民を捨てて、群衆を遠ざけて、涙が溢れ出すままに孤独を求めて、孤独の静けさを讃えたといっています。エレミヤは若い時より試練を受けて、その苦しみを沈黙を守る上で耐えたといっています。

マグダラのマリアの孤独

マグダラのマリアは福音書に登場する女性で、イエス・キリストが十字架にかけられたのを見守り、キリストの復活に立ち会いました。キリストの足元に香油をかけて長い髪で拭った罪深い女性と混合される事もあります。

ペトラルカは Liber secundus X 章 1 節において、マグダラのマリアは贖罪の女性として紹介しており、罪多き人生の後、群衆を避けて一人南フランスのサント=ボーム山塊に、伝説通りに、最後の息を引き取る迄洞窟にこもりました。剥き出しのくり抜かれた岩壁

は、聖なる場所であり、マグダラのマリアがその祈りの観想生活において天使達によって仕えられ、キリストの精神的な女主人として暮らした事を評価しました。

ペトルルカ自身、このマグダラのマリアの洞窟を訪れて、3晩寝泊まりして、孤独の瞑想にふけたといっています。

キリストの孤独

Liber secundus X 章 3 節において、ペトルルカは、キリストという救い主自身、孤独生活を好んだ事に焦点を当てました。その福音を伝える生き方において、頻繁に人気の無い、静かな場所、山頂に登って祈りを捧げました。ペトルルカによると、キリストが独りで祈り、断食をする事でおのれの敵と悪霊の誘惑に打ち勝ったといっています。または、悪魔からの誘惑を受ける為に、霊に導かれて荒野に連れて連れて行かれ (マタイによる福音書 4・1 ルカの福音書 4・13) 四十日間、昼も夜も断食しました。キリストのいこの洗礼者の殺害の知らせを受けて、舟に乗ってひとり人里離れた所に退けられました。(マタイによる福音書 14・13 ヨハネによる福音書 6・1-14) 大勢の病人を癒した時に、キリストは静かな湖のほとりに行き、山に登って座りました。(マタイによる福音書 15 章 29 節) キリストがあえて人気の無い所を選んだ様にペトルルカは、孤独と自然の力でおのれと他者を癒す力に気づいたのでした。

ダビデ王の孤独

ダビデ王は古代イスラエル王国第二代の王であり、(紀元前 1000 年-紀元前 961 年) 愛された人という意味の名前を持ちます。

羊飼いかから戦士としてイスラエル王サウルに仕えて、その後、王位に着き、エルサレムに都において全イスラエル国の王となり、40 年間王として君臨しました。詩人としても有名で、150 編ある旧約聖書の詩篇の内、73 編が疑いがあるものの、ダビデ王の作品とされています。その人生は波乱万丈であり、羊飼いかから戦士に変身した時に、聖油を受けて以来、主の霊 (神霊) が激しくダビデ王に襲いかかり、その霊的試練を受けながらも、戦場においても、サウル王の元に呼び出された時にも豎琴を弾き、心を落ちつかせました。Liber secundus X 章 7 において、ダビデ王が幾度の出陣の際に戦士として勝利を得ますが、サウル王が成功を妬むようになり、サウル王の愛情が憎悪へと豹変して、王から命を狙われるようになり、各地を逃れて転々としましたが、ある時、エン・ゲディの洞窟 (仔山羊の泉というイスラエル南東部の死海の西岸にある町にある) に隠れている時のダビデ王の心境、今迄の暴力と町の争いに身をおく事での哀しみ、動揺、死の恐れ、憂い、苦しみ、不正と悪知恵はようやく洞窟における孤独によって、主の霊が降りてダビデ王の荒ぶった魂を鎮めました。

ペトルルカによると、ダビデ王はその孤独の魂の修養によって、戦場における敵を打ち倒して、おのれの弱さに向かい合って、ようやく精神の自由を得ました。

ペトルルカは、Liber secundus X IV 章 12 節において、アヴィニョンの町の喧騒から独り離れて、自然溢れるソルグ川のほとりで生きる事に、心の安息を覚えました。一文字、

一文字、筆を進める度に川の音色が聞こえて、緑々とした丘に囲まれて、群衆を通す事無く、わずかな住人のみしか通さないこの道は、自由で柔らかな平和の場所です。
そして、ペトラルカはキリストに仕えたのでした。
このペトラルカの孤独生活は次の文章で終わります。

風に揺れる葉の音や
水の音に耳を澄まして
魂は休まる。
そして、私の耳に響く声。
ペトラルカよ
君の忠告は良く
君の決断は正しく
君の言葉は本物。

終

2025 年 1 月 8 日 フランス Angers 祈

霊的治療と信仰 第7部 ペトラルカの孤独生活における魂の護身術 Francesco Petrarca De vita solitaria

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
